

大阪商業大学学術情報リポジトリ

持ち上げの遊戯と行事

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 公開日: 2020-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 浩徳, TAKAHASHI, Hironori メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/880

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



持ち上げの遊戯と行事

高 橋 浩 徳

はじめに

持ち上げる遊戯とは、石や米俵など重い物体を、道具などを用いずに個人の力だけで持ち上げるものである。それは日本各地に点在し、その内容は地域によって異なり、統一されたルールのようなものはない。共通点もあるが、また異なる点も多い。その意義や行事・イベントとしての課題などについて考察する。

持ち上げる遊戯についての研究だが先行研究は見当たらない。石の持ち上げで使用される石で、寺社に奉納されている古くから伝えられているものがあり、これを力石と呼ぶが、力石については1960年代から複数の研究報告がされている。上智大学の伊藤明（1917～1993）や四日市大学の高島慎助（1948～）は精力的に各地の力石を探訪し、数多くの報告をしている。しかし、力石に関する報告は、どこに力石があって、何と彫られているか、いつの時代のものか、という調査が大半である。

「持ち上げる」という遊戯についての論文はこれまでなく、特に石でないものを持ち上げるものは、これまでまとまった報告はなされておらず、今回のものは初めてのもので意義のあるものとする。

第1章 持ち上げ遊戯の概要

1. 持ち上げ遊戯とは

持ち上げの遊戯とは、重いものを持ち上げるゲームのことである。筆者がこう呼んでいるだけで、正式にこう呼称するジャンルのゲームがあるわけではない。全国にはこの行事が30か所ほど存在している。いずれも年に一回だけ行われるもので地域間の連携はない。

ただ地面にあるものを持ち上げるだけで、そういうものがゲームといえるか、という意見もあるかもしれない。人間の行為のうち、自発的で実用性がなく、生産性の無いものを遊びと呼ぶが、筆者は遊びのうち、「はじめと終わりがあるもの」「ルールがあるもの」「勝敗があるもの」をゲームと呼ぶと考える。その定義からすると、明らかにゲームというジャンルに属する。また筆者は遊戯のうち、体力を使い、勝敗の決定に体力が大きな要素となっているものをスポーツと定義したいと考えているが、その意味ではスポーツのジャンルに含まれると考える。

ただ、一般的にはこの遊戯はスポーツとはみなされていない。例えば「スポーツ事典」などには載っていない。統一されたルールも団体もなく、時期も年一回で定期的の実施している人間がいまいことが理由と考えられる。何よりも、全国的でなく、ほとんど知られていないことも原因であろう。

世間的にはどちらかというと祭事や年中行事として捉えられているようである。この類の書籍には、各地の持ち上げ行事が掲載されているものがある。ただ、火祭りや来訪神などのようにジャンルとして掲載されているものは見当たらず、また、特に歴史的由緒のない市民祭などで行われるものは、祭事自体の掲載がないことが多い。

2．持ち上げ遊戯の分類

持ち上げる遊戯は持ち上げる物によって分けることができる。この遊戯に使われるものとしては、石・俵・餅の3種類がある。石は自然石で、特に寺社には力石と呼ばれる古い時代に持ち上げに使用されて奉納されている石があり、これを用いるところが多い。俵は米俵である。一俵の重さは時代や地域によって異なるが、明治中期に1俵＝4斗＝40升＝400合＝60kgに統一されている。ただ地域によって小型の俵を用いたり、中の米を抜いて重さを変えたりするところもある。餅の場合は決まった容積も重さもないため地域によってまちまちである。同じ分量の餅米を用いても、加える水の量によって変わるために地域によって異なるし、同じ行事でも年によって変化する。また餅の場合は、三方に乗せて一緒に持つものが多い。

持ち上げの仕方だが、石や俵の場合は床や地面に置いてあるものを担ぎ上げることで成功とする者が多く、餅の場合は三方ごと持って歩き、どれだけ歩けるかを競うものが多い。個々の事例については次章で紹介する。

第2章 各地の持ち上げ遊戯

1．石の持ち上げ

(1) 太郎石持ち上げ大会

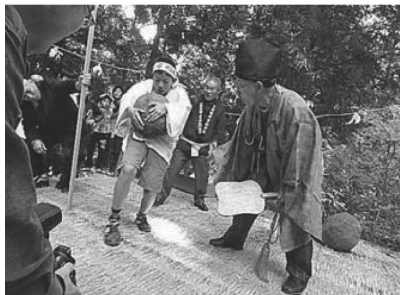
場所：福島県須賀川市塩田字西清水184 菅船神社

時期：11月3日

福島県須賀川市の菅船神社^{すがふね}礼大祭の中で行われる石持ち上げの行事。須賀川市は福島県南部の市だが、菅船神社はその東端^{おしおえ}。小塩江地区にある神社である。祭礼では神事に続いて笛太鼓による囃子が演奏され、その後に太郎石持ち上げ大会が行われる。神社の一画に注連縄を張り、筵の上に太郎石と次郎石が置かれる。太郎石は100kg弱、次郎石は約30kgである。一般男性は太郎石、女性と中学生以下の男子は次郎石を持ち上げる。参加者は自由で受付の後、順番に挑戦する。持ち上げた高さを計測するため、挑戦者の横に係の者が目盛りのついた棒を持って最高に持ち上げた時の高さを読み上げる。筆者は2013年に訪問したが、持ち上げの参加者は次郎石、太郎石ともに3、4人であった。



【図1・2 太郎石持ち上げ（筆者撮影）】



【図3～8 太郎石持ち上げ（筆者撮影）】

(2) 秩父神社の担ぎ石神事

場所：埼玉県秩父市番場町1-3 秩父神社

時期：1月上旬

秩父郡横瀬町の担ぎ石神事保存会によって行われる。もともとは秩父郡横瀬町の神明神社の神事で、毎年10月第2日曜に行われていた。昭和60年に保存会が作られて復活した。「担ぎ石」は1貫（4kg）、3貫（12kg）、5貫（20kg）、9貫（35kg）、16貫（60kg）、23貫（86kg）の6

持ち上げの遊戯と行事

種類。男性は9貫から、子供は1貫から、女性は5貫からで一般の者も参加できる。特に勝敗や順位はない。

(3) 青ヶ島の力自慢

場所：東京都青ヶ島村

時期：8月10日

青ヶ島村は東京都に属し、八丈支庁が所管する人口169人の日本一人口の少ない市町村である。毎年8月10日の牛祭りの際に約90kgの石を持ち上げる力自慢が行われている。

牛祭り

古くから畜産で栄えてきた青ヶ島では、牛への感謝をこめて、毎年8月10日に「牛祭り」を開催しています。島外にいる村出身者もこの日に合わせて帰省してくるため、島内は一斉に賑やかになります。

牛の共進会（品評会）を中心に、相撲大会や90kgほどの丸石を肩まで持ち上げる力自慢、還住太鼓の演奏、花火の打ち上げ、全員参加の島踊りなど、盛りだくさんのイベントです。

かつて畜産が盛んだった頃は、牛相撲が行われていましたが、大切な牛を傷つけるのはもったいないと、人間が代わりに相撲を取るようになりました。



▲迫力の力自慢



▲還住太鼓の演奏

【図9 『支庁の風』93号（平成28年9月）】

(4) 大磐祭り

場所：富山県下新川郡入善町^{おもてぼん} 住吉社

時期：7月24日

富山県の東部にある入善町には住吉社という神社があり、ここで毎夏大磐祭りが行われる。

夕方から太鼓を中心とした囃子の演奏などが行われ、引き続いてメインの石の持ち上げが行われる。

筆者は2018年に訪問した。神社の一角には力石が置かれており、まずは子供の部からスタートする。会場には3種類の米俵が置かれ、参加者は自由である。重さは不明だが小学生低学年用、小学生高学年用、中学生用となっており、持ち上げたいと思う子供が進み出て挑戦する。挑戦した者には菓子がもらえる。大人の部では神社に奉納されている2つの力石、青石（135kg）と御影石（117kg）があり、この年は御影石が使われた。

持ち上げ会場には長机が置かれ賞品が乗っていたが、そこに掲示されている紙には、

特等賞	大磐を肩以上持ち上げた者
一等賞	大磐を胸まで持ち上げた者
二等賞	大磐を膝の上にのせた者
敢闘賞	大石を肩以上持ち上げた者
努力賞	大石を胸まで持ち上げた者
チャレンジ賞	大石を膝の上にのせた者
参加賞	持ち上げようと意欲のある者

と書かれていた。大磐は青石、大石は御影石を指しているようであった。

子どもの部の方は祭りに来ていた中学生の集団から一人ずつ出て挑戦したため大いに盛り上がったが、大人の方は挑戦者が数人しか出て来ず、同じ人に2、3回行ってもらっていた。



【図10～13 入善町大磐祭り（筆者撮影）】

持ち上げの遊戯と行事



【図14・15 入善町大磐祭り（筆者撮影）】

(5) 菟橋^{うはし}神社の盤持大会

場所：石川県小松市浜田町イ-233 菟橋神社

時期：8月27、28日

毎年8月の26日から3日間行われるのが西瓜祭りである。西瓜の豊作を祈ったり西瓜に感謝したりするわけではなく、水と火の祭りでもととは水火と書いたらしい。その祭りの中、27日と28日の晩に行われるのが盤持大会である。持ち上げるのは120kgの石、80kgの米俵、50kgの米俵の三種類。80kgが一般男性用、50kgは女性と中学生用である。参加は自由で受付が設けられ、申し込み順に挑戦する。肩まで担ぎ上げられれば成功となり、成功者には大人の場合一升瓶の清酒がもらえる。80kgの米俵の成功者は石に挑戦できる。順位は決めない。

筆者は2014年に訪問した。行事の開始は午後6時。少し前まで子供の奉納相撲が行われていた境内に作られた土俵が会場である。すぐ横のテントに事務所が作られ、係の者がマイクで案内を始める。参加希望者は申し出るようにとのアナウンスを繰り返すが、時間になっても希望者は2、3人。土俵の回りの観客も4、5人である。

行事開始。マイクアナウンスで紹介が行われる。「それでは盤持ち大会を始めます。最初の挑戦者は〇〇町の〇〇〇〇さんです。」といったアナウンスに続いて挑戦者が土俵に登場し、米俵の持ち上げにかかる。肩まで担ぎ上げて成功となるのだが、一気に地面から肩まで担ぎ上げてしまう人、3、4分粘って腰までで諦める人など様々である。いつのまにか土俵の周囲には五十人ぐらいの見物人が集まっており、挑戦者も途切れることなく続いていた。賞品だが、見事持ち上げた人間には、一升瓶の日本酒が授与されていた。未成年者は図書券か商品券らしかった。また持ち上げられなかった者にも、参加賞ということでハンカチかミニタオルのようなものが出されていた。ときおり石に挑む者がいたが、残念ながらこの年成功者はいなかった。

た。係の人に話を聞くと前年は一人成功した人がいたそうである。挑戦者は途切れることなく続き、夜の9時近くに大会は終わった。大会といっても順位などは決めず、持ち上げた人もそうでない人も、自分の番が終わるとそのまま帰ってしまっていた。



【図16～23 菟橋神社盤持ち大会（筆者撮影）】

持ち上げの遊戯と行事

(6) ^{むかいもとおりしろやま}向本折 白山神社の盤持ち

場所：石川県小松市向本折町巳240-2 白山神社

時期：9月21日

秋祭りで盤持ち大会が行われる。冬瓜石と呼ばれる130kgの石を担ぐ。

(7) 姫路天満神社の力持ち

場所：姫路市大津区天満1204 神明神社

姫路市大津区天満1083 蛭子神社

時期：10月の魚吹^{うすき はちまん}八幡神社の秋期祭礼（ちょうちん祭り）の宵宮（1日目）

魚吹八幡神社（姫路市網干区宮内193）の秋祭りで行われる。境内には江戸時代の力持ち、三ノ宮卯之助（文化三（1806）年～嘉永七（1854）年）が挙げたと言われる力石があり、また卯之助の像が建っている。

祭りでは何台もの屋台が市内を練り歩くが神明神社と蛭子神社に入った際に、そこで力石の持ち上げが行われる。屋台やだんじりを引き回している法被姿の男たちが輪になり、その中心に奉納されている力石を置く。周囲の者たちが代わる代わる出てきて持ち上げに挑戦する。石は複数あって普段は境内に安置されているが、力持ちの際に引き出される。持ち上げることができるとワッペンがもらえるそうで、法被の袖にワッペンが縫い付けてある人は、持ち上げたことがあるということになる。片方の肩に担ぎ上げた後、一旦胸まで下ろし、反対側の肩に担ぎ上げるのが本来だそうだが、そこまで行ったのはほんの数えるほどであった。



【図24・25 天満神社の力持ち（筆者撮影）】



【図26～31 天満神社の力持ち（筆者撮影）】

(8) ちからいし そうじゃ
力石 総社

場所：岡山県総社市総社 2-18-1 総社宮

期日：8月第4日曜

岡山県総社市の吉備の国総社で毎年8月に力石総社と呼ばれる行事が行われる。通常、力石の持ち上げ大会で使われる石は1個～2、3個であるが、ここでは使用する石は半貫（1.9kg）～26貫（97.5kg）37貫（139kg）大関力石（167kg）横綱力石（180kg）まで25種類を使用する。

持ち上げの遊戯と行事

会場には4か所の丸い土俵が設けられ、ここが上げる場となる。最初は半貫（1.9kg）、一貫（3.75kg）、二貫、三貫の4つが置かれ、それぞれに裃姿の行司と記録係が付く。参加したい人間は受付に言って登録すると、力札と呼ばれるエントリーシートを渡される。どの石に挑戦しても良く土俵ごとに並ぶのだが、最初は軽い石なので並んで挑戦するのは子供ばかりである。ここでの上げ方だが、石には縄や帯が結び付けられており、足を少し広げて石が体の真下になるように立ち、縄や帯をつかんで持ち上げる。石が数センチ上がれば時間の計測が始まり、10秒持ち上げていられれば合格で、力札の該当欄にシールを貼ってもらえる。挑戦する者がいなくなると石は一段階重いものに替えられ、四貫（15kg）、五貫、七貫、八貫となる。それもいなくなると十貫（37.5kg）、十二貫、十五貫、十七貫となる。このあたりから大人が参加し始める。順番に挑戦する必要はなく、好きなところに行って合格すればシールを貼ってもらえる。午前中の最後は十九貫（71.25kg）、二十二貫（82kg）、二十四貫（90kg）、二十六貫（97.5kg）で、二十六貫をクリアすると午後の決勝に進出できる。力自慢の者はほとんどこの二十六貫から参加する。

昼食休憩を挟み、午後は三十貫（112.5kg）、三十二貫、三十四貫、三十五貫が置かれて開始となる。この後、三十六貫、三十七貫と続き、大関力石（167kg）、横綱力石（180kg）と進む。複数の人間が横綱力石に挑むことになったときは持ち上げている時間を計測し、長い時間上げていた者が上位となる。

筆者は2016年に訪問した。軽いものがあるため子どもや女性も多く、力石に挑戦した人間は述べ100名を越していたと思われる。見物人も数十人いたが、炎天下ということもあって長時間見続けている者はあまり多くはなかった。



【図32・33 力石総社（筆者撮影）】



【図34～37 力石総社（筆者撮影）】

(9) 川上様夏祭り力自慢

場所：高知県香美市香北町美良布1177-1 美良布多目的運動広場

時期：7月27日

町内にある川上神社の夏祭りの1イベントとして行われる。重さ185kgの力石を担ぐ。少し軽い砂袋なども用意されている。

持ち上げの遊戯と行事



【図38 川上様夏祭りのポスター】

(10) ハンタ石担ぎ

場所：鹿児島県大島郡徳之島町下久志 ^{とくのしまちょうしもくし} 十五夜浜海岸

時期：9月下旬（旧暦8月15日）

旧暦8月15日の夜に十五夜まつりが行われる。相撲や島唄や綱引きなどの行事とともに、ハンタ石と呼ばれる約70kgの力石を担ぐイベントが行われる。



【図39 ハンタ石担ぎ（徳之島町のウェブサイト¹⁾より）】

(11) ビッチュル石奉納

場所：沖縄県石垣市川平678 あかいろめみやとりおん 赤イロ目宮鳥御嶽

時期：7月中旬

八重山諸島では本土の神社に当たる施設を御嶽^{うたき}といい一般にオンと呼ぶ。川平集落には5か所の御嶽があるが、その一つである赤イロ目宮鳥御嶽^{あかいろめみやとりおん}で毎年7月に行われる豊年祭の中で行われる行事で、5人の力自慢がビッチュルと呼ばれる力石を担いで境内を回る。ビッチュルは重さ約60kgの石で、年々大きくなっていると伝えられている。担ぎ手は氏子に限られている。

2. 俵の持ち上げ

(1) 越谷力持ち大会

場所：埼玉県越谷市越ヶ谷4-2-1 越谷市役所周辺

時期：毎年10月頃

毎年10月頃に開催される「こしがや市民祭り」の中の1イベントとして開催される。江戸時代に実在した当地出身の力持ち、三ノ宮卯之助にちなみ2008年に始まった。米俵を持って15mのコースを一往復しタイムを競う。小学生低学年（10kg） 高学年（20kg） 中学生男子（30kg） 中学生女子（20kg） 一般男子（50kg） 一般女子（30kg） シニア男子（30kg） シニア女子（20kg）の各部門がある。

(2) 深川の力持ち

場所：東京都江東区木場四丁目 木馬公園

時期：1月と10月

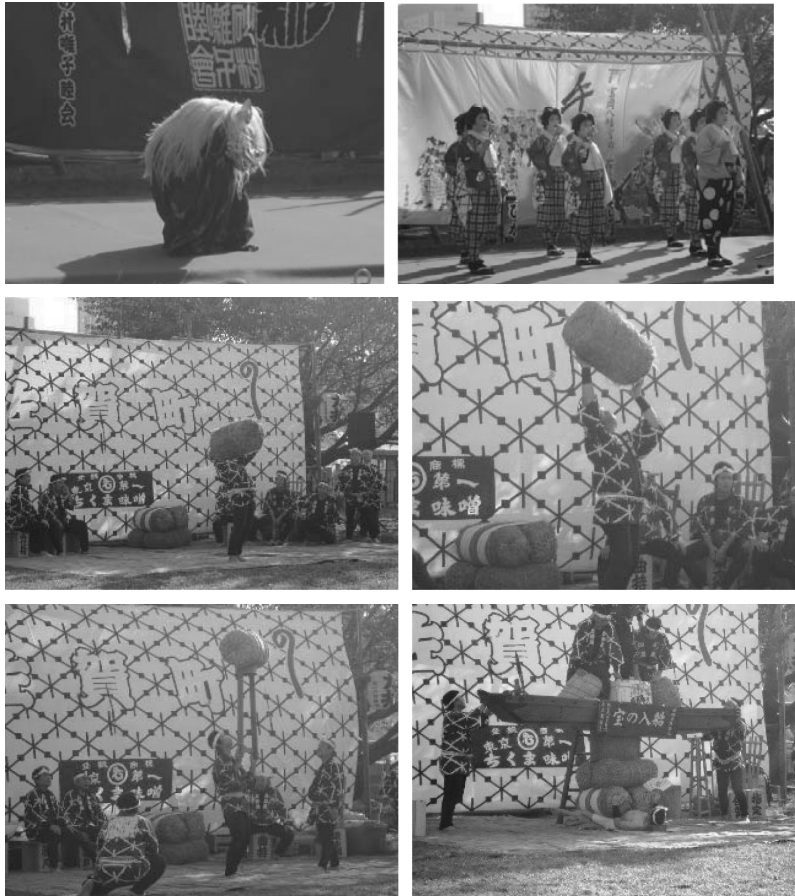
一般参加による持ち上げ大会ではなく、深川の力持ち保存会による力持ちの実演である。1月は江東文化センターで開催される新春民俗芸能の集いの中で、10月は都立木場公園で開催される江東区民まつりの中で披露される。

当地は江戸時代から倉庫地帯であったが、荷物の運搬を行っていた者が余技として力自慢を行い、それが芸能化したものである。江戸時代にはすでに曲芸化していたといわれる。長唄「近江のお兼」の歌詞には「力だめしの曲持ちは石でもごんせ、俵でもござれ」とあり、力持

持ち上げの遊戯と行事

ちの曲芸として石や俵を使用していたことがわかる。

筆者は2009年に江東区民まつりでの実演を観覧した。保存会の会員が入れ替わりつつ、俵を持ち上げる。最初は単に持ち上げるだけだが、箱や脚立を使って持ち上げたり別な者に飛ばして渡したりするような難度の高い芸になっていく。クライマックスでは地面に寝た者の上に臼を載せて餅をついたりし、最後に船を載せてその上に3人の人間が乗るような大掛かりなものが行われた。



【図40～45 深川の力持ち（筆者撮影）】

(3) 新城囃子曲持ち

場所：神奈川県川崎市中原区新城中町4-10-4 新城神社

時期：10月第一日曜

深川の力持ち同様、力持ちの技を見せる曲芸として行われる。明治期に曲芸を行う一団ができたといわれている。現在は10月第一日曜の新城神社の祭礼のときのほか、民俗芸能発表会などで披露される。



【図46～51 新城囃子曲持ち（個人のブログ²⁾より）】

持ち上げの遊戯と行事

(4) ^{じょうはな}城端 別院善徳寺の盤持ち大会

場所 富山県南砺市城端405 善徳寺

時期 7月22～28日の中の日曜日

善徳寺は京都の東本願寺の別院で城端の町の中心部にある大きな寺である。毎年7月下旬に虫干し法会という所蔵する宝物を公開する祭事があるが、その中で行われるのが盤持ち大会である。ここで上げるのは米俵で、一俵60kg 2俵を紐で結んだ120kgである。持ち上げて肩に担いだ後、もう一方の手を水平に上げると成功とみなされる。

筆者は2018年に訪問した。善徳寺は非常に大きい寺で山門は二階に上られる立派な造りで



【図52～57 善徳寺の盤持ち（筆者撮影）】



【図58・59 善徳寺の盤持ち（筆者撮影）】

あった。虫干し法会の主な行事は本堂の内部で行われるが、盤持ち大会は本堂のすぐ正面にブルーシートを敷いた会場を作って行われた。最初は子供の部で、軽めの俵が用意されていた。なかなか上げられない子供の場合は大人が手伝い、肩に担いで手を上げるポーズが取れるまで行わせていた。行事に親しませるためにも、子供にはこのようなサービスをすべきだろう。続いて大人の部だが、参加を申し出たのは3、4名で、いずれも運動着にベルトを着用しており、ウエイト・リフティングやパワー・リフティングといった競技をしている者に見受けられた。俵が2つ繋がっているため、非常にバランスが取りづらいようで、皆苦戦し、挙げられた者は一名だけであった。最後に中年の男性が現れ、軽々と右肩に乗せた後、左手を水平に伸ばすポーズをとった。それから一旦俵を胸のあたりまで下ろしてはまた右肩に担ぎ、左手を水平に伸ばすという動作を何回か繰り返した。後から聞いたところ、隣の市の人でこれまで9連覇しており、今回で10連覇とのことであった。

持ち上げの遊戯と行事

(5) あなみずまちしもからかわ 穴水町下唐川の盤持ち

場所：石川県鳳珠郡穴水町下唐川地区 個人宅

時期：10月

米俵を15kgぐらいから100kgぐらいまで4～5種用意する。数や重さは年によって異なる。当地は江戸時代幕府の天領で年貢の取り立てが厳しかったため、隠し田を作り腹いっぱい食べて持ち上げをして収穫を祝ったことが由来といわれている。



【図60 広報あなみず表紙（2016年12月）】

(6) かほく市の盤持ち

場所：石川県かほく市^{さしえ}指江 指江公民館

期日：11月頃

立志式として15歳になった男子が持ち上げを行う。当初は60kgの力石だったが、60kgの米俵に変わり、近年は30kgと40kgの籾殻の入った2つの俵にしている。



【図61 かほく市広報表紙（2016年1月、かほく市提供）】

(7) ^{のみのすくね}能見宿祢の力自慢競走

場所：兵庫県たつの市竜野町富永 中川原グランド内特設会場

期日：11月3日

市民祭りの中の1イベントとして開催される。日本書紀の中に能見宿祢と^{たいまのけはや}当麻蹴速が戦った記述があり、この部分に「令拵力（スマヒセシム）」とあるところから、これが相撲の初めといわれている。その能見宿祢が死んだのが立野という土地で現在のたつの市といわれているところから、これにちなんで始まった。出場者が制限時間1分間の中で、部門ごとに決められた重さの米俵を担いで歩き力自慢を競う。

持ち上げの遊戯と行事

(8) あいはら俵運び競走

場所：兵庫県洲本市五色町鮎原南谷562 河上神社天満宮

時期：10月の体育の日

地元のブランド米である鮎原米をPRして地域の活性化につなげようとスポーツクラブ21あいはらが企画し、同クラブと神戸新聞社の主催で2010年から始まった。

4人一組の団体戦で一度に2チームが走る形で行われる。境内に米にちなんで一周88mのトラックを作り、米俵を持って走る。3人は1周、最後の一人は2周しタイムを計測する。俵の重さは小学校低学年の部が1kg、小学校高学年の部が5kg、女子の部が10kg、一般の部が30kgである。



【図62 あいはら俵運び競走ポスター】

3. 餅の持ち上げ

(1) 弁慶の力餅競技

場所：岩手県平泉町 JR 平泉駅前広場

時期：5月5日

岩手県西磐井郡平泉町は中尊寺や毛越寺などがあり、奥州藤原氏の本拠として知られる町である。毎年春と秋の2回、藤原氏を偲ぶ藤原まつりが行われている。春の藤原まつりは5月1

日～5日までの5日間行われる。その中では郷土芸能や、武士などに扮した人々の行列などが行われるが、最終日の5日に行われるのが弁慶の力餅競技である。昭和元年から続いているといわれている。会場はJR平泉駅前のロータリーである。

午前中はまず子供たちによるそり引きから始まる。木製のそりの上に餅を乗せた三方を置き、これに綱を付けて引くものである。30mの距離を引き時間を計測する。最も時間の短かったチームが優勝となる。続いて力餅競技となるが、現在はまず子供（小学生）の部である子弁慶競技と女性の部が行われている。筆者が取材した2012年には行われていなかったで、その後実施されるようになったようである。大人同様、腰のところが膨らんだ帯を付け、餅の載っ



【図63～68 弁慶の力餅競技（筆者撮影）】

持ち上げの遊戯と行事

た三方を逆さに載せ、どれだけ歩けるかを競う。重さは50kgとのことである。

その後大人の部となる。重さは三方と餅を合わせて160kgである。餅といっているが、実際は餅米を入れた麻袋である。これを帯の膨らんだところに載せて10m歩ければ予選通過となる。10mでやめても良いが、そのまま歩いても良い。非常に重いために競技者の周囲を、法被を着た保存会の人たちが囲うように付き添う。見物の人間にとっては邪魔な存在だが、運ぶものが重くて危険なため仕方ないのであろう。運んでいる者がもう駄目だとなったところで三方を前に放り出すのだが、このとき付き添う者たちが急いで競技者の体を支え、また、放り出された三方を押さえる。そうしないと競技者が前のめりになって三方の上に倒れたり、三方を足の上に落としてしまったりするために必要なのである。昼を挟んで午後からは決勝となる。決勝は歩けるだけ歩いて良いため、駅前のロータリーをはみ出して一般道路へ出てしまう者もいる。昨今は有名になったため、他県からも参加者があるようである。

(2) 醍醐寺五大力^{にんのうえ}仁王会

場所：京都府京都市伏見区醍醐東大路町22 醍醐寺

時期：2月23日

台に乗った餅を持ち上げ、持ち上げている時間を競うものである。重さは餅と三方を合わせて男性は150kg、女性は90kgである。台の一边は80cm近くあり、餅は2段で下が直径約80cm、上が直径約50cmである。台が大きいので、上から持つようなことはできず、腰を低く落として後ろに反り、数センチ持ち上げた姿勢で静止することになる。台が少しでも床から離れると横にストップウォッチを持った係がいて計測が始まる。台を戻すまでの時間が計測されるが尻餅をついてしまってもそこまでとなる。優勝者と2位、3位の者にはその餅が賞品として授与される。

筆者は2011年の行事を見学した。終了後に境内を歩いていると、参加者数人を含む一団が集まって話をしていた。どうやらこのイベントのために特別に訓練をしていた集団で、かなり前から練習をしていたようであった。後日テレビ番組を見て知ったが、このイベントのために実際に使用される台と同じ大きさ・重さの台を作って訓練をしている人たちがいるとのことであった。この一団がそうだったと考えられる。賞品はただの餅であるので名誉が目的と考えられる。



【図69～74 醍醐寺の五大力仁王会（筆者撮影）】

(3) 薬王寺の大鏡餅競争

場所：兵庫県南あわじ市北阿万筒井1222 薬王寺

時期：1月12日（本尊の初縁日）

厄除け祈祷大祭の余興の行事として行われる。境内に30mのコースが作られ、大きな鏡餅と台座の三方を合わせて重さ150kgを腹に抱えて運び、歩いた距離を競う。昭和初期から始まったといわれる。

持ち上げの遊戯と行事

(4) 顕密寺五大力餅会陽

場所：岡山県美作市尾谷1111 顕密寺

時期：2月第一日曜

餅を乗せた三方を持って歩き、歩いた距離を競う。重さは上の餅53kg、下の餅81kg、三方48kgで総重量は約180kgである。午前中には子供会陽を行う。参加は小学生に限られる。重さは53kgの餅で、持って歩くことはせず、持ち上げている時間を計り、最も長い時間上げていた者を優勝とする。午後からは大人の部となり、最も長い距離を歩いた者が福男となる。福男には上の餅が授与される。承久三（1221）年に鳥羽上皇が隠岐の島に配流される途中でこの寺に立ち寄って祈願した際、近隣の農民が餅を作って献上したことから始まったとされている。

(5) 善福寺の餅さし

場所：島根県雲南市吉田町上山376 善福寺

時期：2月15日

1斗8升の餅を搗き、重さ約45kgの餅にして紙で包み縄で縛る。競技者は縄のところを持って一旦肩まで上げる。そこから腕を真上に伸ばし、肩まで戻すことを何度も繰り返す。これを何回行えたかを数え、最も数の多かった者が優勝となる。



【図75・76 善福寺の餅さし（個人のブログ^{3）}より】

(6) 長尾寺^{だいえよう}大会陽力餅運搬競技大会

場所：香川県さぬき市長尾西653 長尾寺

時期：1月7日

新年の大法要の際の行事として行われる。餅を乗せた三方を持って歩き、最も歩いた距離が長い者が優勝となる。餅と三方の合計は約150kg。若者の体力向上を目的として始まったとも、また黒岩という力士がいて境内の大石を持ち上げて金剛力を授かったことで始まったともいわれる。100年近く続いているといわれている。子どもの部もあり、こちらは45kgの砂袋を持って歩く。



【図77 長尾観音力餅ポスター】

(7) 総本山善通寺大会陽

場所：香川県善通寺市善通寺町3-3-1 善通寺

時期：2月第4日曜

餅を乗せた三方を持って歩き、最も歩いた距離が長い者が優勝となる。大人の部では餅が2.5斗（約22.5kg）と三方（約120kg）の合計は150kg近い。大人の部、女性の部、ちびっこの部（小学生）がある。大人の部の優勝者には餅と賞金3万円、準優勝者には餅と賞金2万円など8位まで賞金があり、女性の部の優勝者には餅と賞金2万円、準優勝者には餅と賞金1万円などの賞がある。ちびっこの部は菓子袋詰めの参加賞がある。昭和30年代に商工会役職員が企

持ち上げの遊戯と行事

画して始まった。

(8) 捧げ餅競走

場所：徳島県阿南市津乃峰町東分343 津峰神社

時期：4月第1日曜頃

桜祭りの中のイベントとして行われる。健康であることを神に感謝するという趣旨で明治時代から行われているといわれている。餅を乗せた三方を持って一周15mのコースを走り、何周できるかを競う。重さは小学生10kg、女性30kg、男性50kgである。



【図78 捧げ餅競走（阿南市のウェブサイト⁴⁾より】

(9) 大山寺の力餅^{たいさんじ}

場所：徳島県上板町神宅大山4 大山寺

時期：1月第3日曜

紅白の鏡餅を抱えて歩き、その距離を競う。男性の部は約150kg、女性の部と小学生の部は50kg、幼児の部は10kg前後で年によって若干異なる。

戦国時代の武将で阿波国板野郡七条の城主、七條兼仲が大山観世音菩薩に参詣して比類なき怪力を授かり、お礼として石塔と鏡餅を山麓より投げて奉納したところ、住職がこの話を伝えようとして始めたといわれている。七條兼仲は怪力無双の将として知られている。



【図79 大山寺の力餅（大山寺のウェブサイト⁵⁾より）】

(10) 大力餅運び

場所：宮城県東諸県郡国富町大字本庄4847 ^{けんのつか} 剣柄 稲荷神社

時期：2月最初の午の日

三方に乗った紅白の餅を持って20mのコースを歩き、歩いた距離を競う。重さは合計で約100kg。同神社は本庄というところにあるため一般に本庄稲荷神社と呼ばれている。2月最初の午の日に初午大祭が開かれるが、その際の1イベントとして行われる。平成四（1992）年に



【図80 剣柄稲荷神社の初午大祭ポスター】

持ち上げの遊戯と行事

宮司の発案で始まった。子供の部（小学校４年生以下）と大人の部がある。

４．その他の持ち上げ

(1) 与野の力自慢大会

場所：埼玉県さいたま市中央区与野

時期：不定

同区内にある上諏訪神社に力石が奉納されていることから、これを知ってもらおうと2016年から始まった。力石は使わず30kgの砂袋を用い、いかに「安全に、美しく、力強く」上げられたかを審判が判断する。優勝者には米一俵の賞品があり、参加者全員に米２合の参加賞がある。



【図81 与野の力自慢大会（JAさいたまのウェブサイト^{6）}より 写真提供：JAさいたま）】

(2) ちびっ子力自慢大会

場所：広島県竹原市本町１－３ 住吉神社

時期：７月最終土曜

住吉神社に奉納されている力石にちなむが、力石は使わず縄で縛った砂袋を上げる。重さは５kgから５kg刻みで好きなものを持ち上げる。１０秒間持ち上げていられれば合格で景品がもらえる。

以上、筆者の調査では、約30ヶ所で持ち上げの行事が行われている。持ち上げ行事に用いら

れるのは基本的に石と俵と餅の3種類で、その他の場合は代用品であるといえる。

5. 消滅した持ち上げ行事

このほかに、行われなくなった持ち上げのイベントがいくつか存在する。

(1) 北海道夕張郡栗山町の盤持大会

米俵を持ち上げる。片方の肩に担ぎ上げたら、もう片方の腕を水平に伸ばすと成功とみなされる。複雑なルールはない。米俵は3斗俵(45kg)2個、3.5斗俵(52.5kg)2個、4斗俵(60kg)2個、5斗俵(75kg)1個を作り、この組み合わせで4斗(60kg)～9斗(135kg)の重さの俵ができるようになっている。競技者はまず4斗に挑戦し、成功すると一段階重いものに挑戦できる。成功者が一人になるまで行い優勝者を決める。平成十三(2001)年が第72回で、この回をもって終了した。理由としては人口の減少により地元参加者が減少したことや運営組合の高齢化などがある。この経緯は木内明氏の論文が報告している。

(2) 比嘉ウチョー杯力石チチイン自慢大会

2001年、沖縄県島尻郡玉城村たまぐすくそん(2006年に周辺の町村と合併して島尻郡より離脱し、現在は南城市となっている)の「第6回たまぐすく祭り」の中の一行事として、比嘉ウチョー杯力石自慢大会が開催された。比嘉ウチョーは約600年前に存在したといわれる怪力の大男で2トンの石を持ち上げたといわれており、それにちなんでいる。40kg～90kgの5個の力石を使って順に重い石に挑戦していき、最後に残った者は90kgの石を何回持ち上げられるかで勝者を決定した。しかし同年12月に力石が盗難にあい、それ以来開催されていない⁷⁾。

力石研究者の高島慎助『力石』(岩田書院、2011)によれば全国で石が33か所、俵が8か所、餅が8か所の計39か所の持ち上げ行事があると書いている⁸⁾。しかし、2018年度に筆者が調査したところによると、そのうち以下の地域については情報がなく行われなくなっていると考えられる。

○力石

- ・福島県二本松市 宮平神社
- ・埼玉県比企郡ときがわ町 稻荷神社
- ・埼玉県比企郡嵐山町 県立嵐山史跡の博物館

持ち上げの遊戯と行事

- ・福井県越前市朽飯町 十王堂
- ・兵庫県姫路市広畑区 広畑天満宮
- ・兵庫県加東市高岡 高岡稲荷神社
- ・岡山県真庭市大庭 大庭八幡宮
- ・山口県柳井市伊保庄 賀茂神社
- ・愛媛県東温市牛湫 浮嶋神社
- ・高知県高知市土佐山 仁井田神社
- ・沖縄県島尻郡久米島町

○米俵

- ・富山県射水市寺塚原
- ・石川県羽咋市大町

○餅

- ・香川県宇多津町 多聞寺

この10年近くで16箇所がなくなったことになる。もっとも無くなったものがすべて古くから行われていた伝統のあるものであったわけではない。近年になって始まったが続かなかったものも存在する。この背景としては、地域活性化や観光資源として持ち上げを企画したが、思ったほどの成果を上げなかったために廃止したものと考えられる。

力石自体は全国に一万個以上確認されており、石の持ち上げだけでももっと多くの行事があったと考えられる。次第に行う地域が減り、行事がなくなったところも多いと考えられるが、残念ながらこういった行事の記録はほとんど残っておらず把握できない状態である。

6. 海外の持ち上げ

重いものを持ち上げる、という意味では、この遊戯は日本だけのものではない。ただ米俵や餅は当たり前だが日本独自のもののようで、筆者が調査した限り海外には無いようである。

(1) 石の持ち上げ

各国に石を持ち上げる習俗がある。日本の力石の中には有名な石があるが、海外にもそのようなものがある。

アイスランド西部のデューパロンサンドゥル (Djúpalónssandur) 海岸には4つの大石があり、持ち上げに使用される。これらにはフトウルステック (Fullsterkur) ハルフステック (Hálfsterkur) ハルフドレットティング (Hálfdrættingur) アムロズイ (Amlóði) という名前

が付いている。重さは順に154kg、100kg、54kg、23kgである。一番重い石を持ち上げることに成功した者だけが、この海岸で釣りをすることを認められたといわれる。また西部の町フッサフェル（Húsafell）にはフッサフェル石と呼ばれる有名な石があり、その重さは186kgで力試しの石として知られている。国際的な競技会ではこの石の複製が用いられることがある。



【図82 デューパロンサンドゥルのカ石
（アイスランドのガイド^{9）}より】



【図83 フッサフェルストーン
（wikipediaのHúsafell stone
のページ^{10）}より】

スペインとフランスの国境部に存在するバスク地方でも石の持ち上げが有名で、ここではハリ-ジャソツアイリーク（Harri-jasotzaileak）と呼ばれる。

スイスでは、インターラーケン（Interlaken）の町で1805年から行われているウンシュブンネン祭（Unspunnenfest）のときに行われるウンシュブンネン石を投げる競技が有名である。ここで用いられる石は184.1ポンド（約83.5kg）の花崗岩で代々使用されている。

その他の国でも石の持ち上げや石投げは世界各国で行われている。また、それ以外にも、名前のない時期の決まっていない持ち上げ遊戯は随所で行われていると考えられる。およそ、複数の人間がいれば力の優劣を争うのはほぼ当たり前で、持ち上げは相手を傷つけることなく力の優劣を証明できる手段であり、非常に古い時代から広範囲で行われてきたと考えられる。

（2）投げ飛ばし・投げ上げ・担ぎ競走

何かを投げて遠くあるいは高く飛ばすゲーム、重いものを持って走るレースは、いくつか存在する。イギリスのものについては拙論「世界のユニークなゲームイベント」（『ギャン布林

グ&ゲーミング論集』ギャンブリング&ゲーミング学会、2019）を参照していただきたい。

真上に投げ上げる競技としては、スコットランドやアイルランドで行なわれている「藁束投げ」がある。これは藁束を農業用フォークで刺し、宙に放り上げて棒高跳びのようなバーを越えさせる競技である。その他下記のようなものが行われている。

・投げ飛ばし

クリスマスツリー投げ（ドイツ）

ハギス投げ（イギリス） ハギスは羊の胃袋に内蔵・野菜・穀類・香辛料を詰めて煮込んだスコットランドの伝統料理。

マンゴールド投げ（イギリス） マンゴールドは青菜の野菜。

木靴投げ（イギリス）

牛の糞投げ（アメリカ）

ボラ投げ（アメリカ）

フルーツケーキ投げ（アメリカ）

かぼちゃ投げ（アメリカ）

マグロ投げ（オーストラリア）

携帯電話投げ（フィンランド）

長靴投げ（フィンランド）

・投げ上げ

藁束投げ（イギリス、アメリカ）



【図84 マンゴールド投げ（マンゴールド投げ協会のウェブサイト¹¹⁾より】



【図85 藁束投げ（wikipediaの藁束投げ(Sheaf toss)のページ¹²⁾より）】

- ・担ぎ競走

- 石炭運びレース（イギリス）

- 羊毛運びレース（イギリス）

多くは日常生活から起こったものである。それが祭りやイベントと化したもので、多くは地元住民のためのものだが、中には遠くから参加者や見物客が来る観光イベントとなっているものもある。

第3章 持ち上げ遊戯の考察

1．歴史や由来

持ち上げ遊戯がなぜ起こったのか、はっきりしたことはわかっていない。現在行われているところでは、その歴史を謳っているところもあるが、古くから行われているというところで信憑性のあるところはあまりない。考えられる出自としては以下のものがある。

(1) 単なる遊びから派生した

昔は力があることが有能であった。特に男性の場合は力があることにより、高い地位や報酬を得たり、美しい妻を娶ったりすることができた。複数の人間が優劣を争おうとした場合、力比べをすることになったのは必然と考えられる。格闘も考えられるが、娯楽として競争する場合は、互いを傷つけることのないように重いものを持つという行為が用いられたと考えられる。

(2) 通過儀礼

昔は機械がなく、狩猟にせよ農業にせよ漁業にせよ力が必要で力のあることが一人前の証であった。一人前となったことの証明には力のあることが重要で、一定の力のあることの証明として決まった重さのものを持ち上げることが行われたと考えられる。

(3) 力持ちの英雄にちなむ説

昔は力の強い人間が魅力的な人間で、力持ちの英雄譚は多くの時代に存在する。例えばヘラ

持ち上げの遊戯と行事

クレスやサムソン、日本ではあまのたちからおのみこと天手力男命、武蔵坊弁慶、巴御前などである。

江戸時代には谷風梶之介や雷電為右衛門などの強い相撲取りも英雄視され、また実際に力持ち興行を行った三ノ宮卯之助などもある。寺社に奉納してある力石には、持ち上げた人間の名前とその期日や重さが彫られているものも多い。その石があるため、これにちなんで力石や持ち上げのイベントを行っているところも何か所がある。こういった力持ちにあやかった話を伝えるために、持ち上げの行事が行われるようになったと考えられる。

(4) いしうら石占との関連

石占とは石を持ち上げて吉凶を占うことである。持ち上げられたら願いが叶う、あるいは心掛けの良い者は持ち上げることができるが悪い者は持ち上げられない、といったいわくのある石が随所にある。また、持ち上げてみて、軽く感じたら願いが叶う、重く感じたら叶わない、というものもある。こういった習俗が石の持ち上げに転じたという説がある。石占では京都市伏見区の伏見稻荷や大阪市住吉区の住吉大社の「おもかる石」などが良く知られている。いずれも両手で持ち上げられる大きさ重さである。力石は一般の人間では持ち上げられない重さである。石占用の石は誰でも持ち上げられなければならない、性質としては異なるものといえる。石占が力石に転じたというのは、どちらも持ち上げるものであるために生じた誤解か、もしくは誤った説と考えられる。

ゲームと占いは非常に似た性質を持っている。例えばトランプ（プレイングカード）はゲームにも用いられるし、占いにも用いられる。日本で一般にタロットと呼ばれるタローカードは、占いの道具として用いられることが多いが、元々はゲーム用のカードである。綱引きもゲームであるとともに、吉凶や豊作を占うことが行われた。持ち上げもゲームであると同時に、上がれば吉で上がらなければ凶といった占いにも用いられたことは決して珍しいことではなかったと考えられる。ただ最初が占いで後にゲームに転じた、ということは考えにくい。

持ち上げというのは非常に簡単な行為で、持ち上げる対象物が普通に近くにあった石などであることを考えると、非常に古い時代、文明の誕生以前から存在したと考えられる。したがって、発生を追うのは不可能と考えられる。個々の行事については各行事の項に記したような理由があるが、多くは行事に意味を持たせるために作られた説と考えられる。

2．行事の時期

(1) 石の持ち上げ

7～10月に多く集まっているが他の月にもある。元々秋は祭礼が多いため、その地域や寺社の祭事の際に行うようになったと考えられる。

(2) 俵の持ち上げ

米俵を持ち上げる行事は10、11月に集中している。これは米の収穫祭の意味があると考えられる。米を収穫して俵を作り、それを運ぶためには持ち上げなければならない。そのような作業の中から自然に力比べが発生したと考えられる。石の持ち上げに比べてほとんど調査や研究がされていないのは、石の持ち上げが明確に遊戯と考えられたのに対し、米俵の持ち上げは実生活に直結するものであったために遊戯と考えられなかったためであろう。

(3) 餅の持ち上げ

餅を持ち上げる行事や持ち運ぶ行事は1、2月に集中している。餅を作るのは正月や小正月が多く、その時期にしか行われなかったと考えられる。正月や小正月は神事や祭礼を行うことが多く、そのときの行事として定着したと考えられる。

3．地域性

石の持ち上げは全国的に分布している。力石が全国的に分布していることを考えると、石の持ち上げは全国的に存在し、徐々に行われなくなって現在に至っていると考えられる。俵の持ち上げは全国的にも数が少ないため、地域性があるのかどうか判別できない。曲芸となっている「深川の力持ち」「新城囃子曲持」は荷揚げの作業をしていた者たちの娯楽から生まれた。「城端の盤持」と「穴水町の盤持」は盤持が行われている富山・石川の行事だが、力石がなかったため米俵にしたと考えられる。餅の持ち上げは京都より東にはないが、理由は不明である。

全体的に見てみると、富山・石川と兵庫・岡山・香川・徳島の2か所に多く存在しているように見える。富山・石川は「盤持ち」というこの地域だけの共通の名前になっていることや、肩の上に載せて、もう一方の手を水平に伸ばすという仕草も共通していて興味深い。特に行事間の連携はないようであるし、由来もそれぞれであるので、ここ一帯の特徴であるのか、それとも近い地域のものを真似て始められたものなのかはわからない。入善町観光協会のウェブサ

持ち上げの遊戯と行事

イトの大磐祭りの項には「かつては県内の至る所で行われていた石盤持ちであるが、現在も続いているのはここだけである」¹³⁾と記載されている。ただ力石は富山・石川地方だけでなく全国に点在している。盤持ちと呼ぶことで共通していたと考えられる。兵庫・岡山・香川・徳島についても関連性は不明である。しかし、三方に餅を載せ縛って動かないようにし、これを持って歩くという様式は共通で、歩くコースも20m程度のものを作り、そこを往復するといったところまで同じなのは奇妙である。近くの行事ということで情報が伝わり、自分のところでもやってみようということになったと考えられる。数百年の歴史を持つ、といった由緒は後づけで作られたものと考えられる。

4．ゲーム性

持ち上げ遊戯は世界で最も単純で最も短いゲームといわれる。であればそのゲーム性はどうなのであろうか。筆者は9か所の行事を取材したほか、動画配信のウェブサイトなどで、ほぼ全国の持ち上げ行事を見たが、次のように考える。

石は自然石であるために手をかけるところがないことも多く、その場合は非常に持ち上げにくい。抱きかかえられるような大きさであれば、腕全体で持って体に密着させ、少しずつ上にずらしていくことで肩まで上げることが可能である。しかし一般に力石は大きさや形や表面の様子が一様でないため、同じ重さでも難易度が異なるといえる。

依は手で藁を握ることができるため、掴むのはたやすい。ただ石と違って滑らないため、体に密着させたのちに少しずつ上にずらしていく、ということがしづらい。そのため回転させながら上げていくことにすると、重心が体から離れるためにバランスを取るのが困難になる。

次に餅であるが、これは「醍醐寺の五大力村仁王会」と「善福寺餅さし」を除くと、下から持ち上げるのではなく、持った状態で歩く「持ち（餅）運び」である。餅の載った三方は容積が大きくどうしても重心が前方になるため、体を後ろに反らせて重心を体に近づけることが必要になる。

いずれもある程度の技術やコツといったものが必要になるが、それは見ている者にはわかりにくい。派手なパフォーマンスもなく、時間も短いためにドラマ性も低く、見るスポーツ・見るイベントとしては魅力の乏しいものといわざるを得ない。

5．課 題

現在、持ち上げ遊戯の行事は寺社の行事として行われているところが多いが、祈祷や奉納の

意味合いや競技の意味合いよりも、娯楽やイベントとしての性格が強い。主催が寺社であっても市区町村とタイアップした観光行事や地元振興行事であることの方が多い。ただ、成功しているといえるところはそれほど多くはない。

近年の傾向としては、軽いものを用意し、女性や子供が参加できるように配慮しているところが増えていることが挙げられる。岩手県平泉町の弁慶の力餅競技、徳島県の大山寺の力持ちなどは、これまで一種類で男性しか参加していなかったところであるが、女性用や子供用を設けたことで参加者増につながっている。参加者増は見物客増につながるわけで良い方策といえるだろう。また、岡山県総社市の力石総社のように数多くの力石を用意し、どこまで持ち上げられるか複数回挑戦できるようにして、誰でも参加でき、また一人が参加できる時間を伸ばすのも有効な手段であると思う。

他には複数の行事と絡めて集客を図ろうとするところもある。兵庫県たつの市、高知県香美市、宮崎の本庄稲荷神社の餅運び、などである。元々神事でも故事でもないという理由もあるだろうが、このように、持ち上げ自体は単純で短時間だが、盛り上がるイベントとすることは工夫次第で可能だといえる。

おわりに

力仕事は機械が行うようになった。力のあるものがヒーロー視される時代ではなくなった。また、スポーツはテレビのニュースなどを見ていると、競技者の生い立ちや日頃の生活などを紹介するようになっている。これは人々が単純にその競技の結果だけでなく、ドラマを求める時代になっているといえよう。そう考えると、力だけがポイントのように見え、簡単に終わってしまう持ち上げという遊戯は人々の興味を惹かないものとなっているといえる。

全国的に伝承遊戯の行事が少なくなっている状況であるが、持ち上げの行事が減少しているのもやむを得ないと思う。持ち上げを新たに始めるところもあるが、これはイベントとして作りやすいことを意味している。しかし、早々になくとも多いことから、あまり人々の興味を惹いていないようである。持ち上げは一般に力の強い者だけが参加するものであり、一般人が行うものではない。だとすれば見ていて面白い、あるいは感動するようなものでなければ見物人も増えない。しかし、それほど見ようという興味を惹くものでもないのである。うまく上げられれば拍手はする。しかし、人が変わっても同じことをするだけであり、何

度も見ようという気にはならないのであろう。

各地の持ち上げ行事では、似たような参加者をよく見かける。持ち上げを趣味にしている人間である。そして地元の参加者がほとんどいないイベントもある。情報ネットワークが発達し、誰でも情報を手軽にネットに出したりアクセスしたりするようになり、田舎の小さいイベントも全国に流れるようになった。そのためこういった人間が辺鄙な地域の小さな行事に参加するようになった。それは地元の参加者が少なくなって行事が続けられるという良いことであるとともに、地元の人間が出ないため一層地元の人間の興味を惹かなくなるという側面を持っていると考えられる。良し悪しはともかく、運営する側としてはこのことをよく考える必要があるだろう。9割近くが地元民でなく駐留している自衛隊からの参加者となり、

「そのありように不安や疑問が呈されると、平成13年の行事を最後に、保存会はとうとう長い歴史に終止符を打ち、自ら大会に幕を下ろすことを選んだ¹⁴⁾。」

という夕張市栗山町の盤持ち大会は、他の地区の行事にもあてはまる事態となっているからである。

もし、現在の運営者が伝統を守ろうというなら何かしら考えるべきだろう。そうしないと、置いてあるだけの力石となるし、実際そうになっているところは多いのである。

〔注〕

- 1) <https://www.tokunoshima-town.org/kikakuka/chose/koho/photonews/180926shimokushijyuugoya.html> 2018.12.28
- 2) <https://ameblo.jp/furaaki/entry-12081409746.html> 2018.12.28
- 3) http://www.nanushi.com/blog_old/archives/2013/02/post_2763.html 2018.12.29
- 4) <http://www.city.anan.tokushima.jp/docs/2010120300124/> 2019.1.8
- 5) http://taisanji.jp/?page_id=10 2018.12.29
- 6) <http://www.ja-saitama.or.jp/wp/?p=1893> 2018.12.29
- 7) 「区の宝物が盗まれた／玉城村船越に伝わる「力石」」(琉球新報2001年12月18日)
- 8) 高島『力石』、188～193頁
- 9) <https://guidetoiceland.is/connect-with-locals/regina/djupalonssandur-beach---a-lava-wonderland> 2019.1.4
- 10) https://en.wikipedia.org/wiki/H%C3%BAsafell_Stone 2019.1.4
- 11) <http://www.mangoldhurling.co.uk/index.html> 2019.1.4
- 12) https://en.wikipedia.org/wiki/Sheaf_toss 2019.1.4
- 13) <http://www.nyuzen-kanko.jp/miru/374/> 2019.1.5
- 14) 木内、89頁

〔参考文献〕

伊藤明「力石による力業」『ソフィア』第36巻第3号、上智大学、1987年
大泉陽一『未知の国スペイン ―バスク・カタルーニャ・ガリシアの歴史と文化―』原書房、2007年
木内明「民俗行事の消滅と共同体の変容 ―北海道夕張郡栗山町の盤持ち大会をめぐる地域社会の変容―」『ス

ポーツ人類学研究』第12号、日本スポーツ人類学会、2010年
佐藤要人編『国文学・解釈と鑑賞519 川柳・江戸の遊び』至文堂、1975（昭50）年
瀬戸口照夫「力石」大林太良編『民族遊戯大事典』大修館、1998年
高島槇助「三ノ宮卯之介の「力石」」『四日市大学論集』2巻8号、四日市大学、1996年
高島槇助『力石』岩田書院、2011年
増田康弘編『遊びの大事典』東京書籍、1989年
三隅治夫他編『祭・芸能・行事大事典』朝倉書店、2009年